

仙台大学通信教育指導室メールマガジン 第32号

通信教育指導室から、こんにちは。

有田先生がよく使う表現

前号の「ユーモア教育」の面白さに、多くの読者が舌を7回半巻きました。が、今号は、中学生の英語による自己表現を紹介したいのでR。

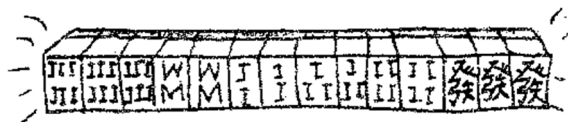


生徒のユーモアにニッコリ！

中学2年の晩秋。子どもたちが習ったばかりの感嘆文を使って英詩の創作にチャレンジしました。

I LOVE MAHJONG

I like mahjong.
How beautiful Daisangen is!
How beautiful Tenho is!
How beautiful All Green is!
But these are very difficult.
So I can't do them.
But I love mahjong.
Mr. Toshitaka!
Let's play mahjong!



ALL GREEN

(H. A)

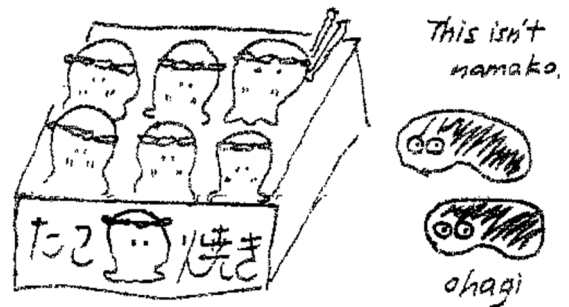
『オレは麻雀が好き』(作:野球部H.A君)。まず、大胆かつ不謹慎なタイトルに仰天。加えて、「大三元」「天鵬」「緑一色」と役満のオンパレードと「先生、麻雀やろうぜ！」の決めゼリフに、子どもたちも大喜び。ユーモアのセンスもピカイチでした。

この『オレは麻雀が好き』をはじめ、出てきた作品群を読んで、なかなかやるじゃないかとニンマリしたものです。

次に紹介する『たこ焼き』という詩も、いつもは寡黙なソフトボール部のC.Mさんのユーモアあふれる作品。

TAKOYAKI

Takoyaki is nice.
Ohagi is nice, too.
What nice Japanese foods these are!
So, I go to "Takoyaki-ya-san."



授業中、急にたこ焼きとおはぎを思い出し、つれづれなるままに書きました。英語にするとメクサイ。訳してもメクサイ。

(C. M)

「たこ焼きとおはぎを思い出させる授業？—そんな授業、したっけ？」と思わず自問自答したのでR。

自己表現を通して互いを知る

次に紹介するのは、中学1年の定番『一日の生活』。「自分の生活を英語にしてもみんな同じになるので、家族や友だちにインタビューして、その一日を英語にまとめてみよう」と子どもたちに提案しました。

それぞれにいろいろな気づきがあり、楽しい発表会になりました。

兄の一日

My brother gets up at six twenty.
He eats breakfast at six thirty.
He goes to his high school at six forty-five.
He goes to school by motorcycle.
He eats lunch at eleven forty and twelve forty.
He plays baseball after school.
He gets home about seven.
He eats dinner about seven ten.
He goes to bed about eleven.



私の兄は毎日野球をやっています。これを書くために、お昼は何時と聞いたとき、2回も食べていることに、初めて気づきました。

(Y. E)

父の一日

My father gets up at six forty every morning.
He eats breakfast at seven thirty.
He goes to his office at eight.
He eats lunch at one.
He eats dinner at eight.
He gets home at eleven.
He goes to bed about twelve.

父の職業は用水路や道路の設計をする土木設計士です。古川の方には父が設計した道路や用水路がいくつもあります。

(T. Y)

母の月曜日

My mother gets up at five fifty.
She eats breakfast about seven.
She goes to her store about nine.
She gets home at five thirty.
She eats dinner at six thirty.
She goes to bed about twelve.

私の母は毎週月曜日パンの配達をしています。昼食がとれないぐらいいろんな所を車に乗って走り回っています。



(A. H)

思春期を迎えた我が子との対話の時間は、保護者にとって貴重な時間になったようです。生徒にとっても、両親に対する感謝の気持ちを新たにする機会となったのでR。